

目次

序章 日本神話は歴史的事実の記憶である

「天孫降臨」のイメージと誤解	10
天孫降臨の「天」とは何か	13
天孫降臨は天 $\parallel$ 空から「降りる」ではない	17
かつて人口は日本列島東部にのみ集中していた	20
日本の中心は東国「日高見国」にあった	24
考古学研究が示す日高見国の主要地域	26
縄文土器文化を担っていた日高見国	29
東日本が記紀で重く語られないのはなぜか	30
記紀に政治的な脚色はない	34

## 第一章 高天原とは何か

- 「島」をつくったイザナギ・イザナミ……………40
- 現実社会の起源として記された高天原……………44
- 高天原は触れてはいけない謎ではない……………46
- 島国という国家意識を示す国産みの神話……………49
- 縄文時代にはすでにあった国家体系……………52
- 高天原はどこにあったか……………56
- 富士山が高天原である可能性……………59
- 日本神話における高天原の変化……………61
- ギリシャ神話を知っていた日本神話……………63
- 別世界ではなく地上にある黄泉の国……………65
- イザナミの墓、黄泉の国がある場所の意味……………68

## 第二章 「天孫降臨」の真実と通説の誤ち

- 簡単ではなかった降臨の道のり……………72
- 当初の予定は「天子降臨」……………73
- 葦原中津国という名が意味する場所……………75
- 日高見国と大陸の情勢……………77
- ニニギノミコトとその一行……………80
- 正統な家系と血統による統治……………83
- 鹿島から船で出発した天孫降臨……………86
- 海人サルタヒコの水先案内……………90
- 鹿兒島に到着したニニギノミコト一行……………91
- 船で東に進んでいった彼方にある「常世の国」……………96
- 亡き母の国「妣の国」……………100
- 「常世の国」と「妣の国」の東西対比……………102
- 関東「かたち」、関西「言葉」の文化の関係……………104
- 「かたちの文化」の中心としての富士……………106
- 日の上る方角に理想があった日本……………108
- 九州に高天原はありえない……………110
- 神話と土地の記憶と考古学的な事実……………112

縄文を体現しているサルタヒコ	115
アメリカ大陸に渡っていた縄文人	116
天孫降臨は弥生時代に行われた	120
大量の人員が遠征した天孫降臨	122
隼人、熊襲もまた天孫降臨による移住民	124
鹿兒島の名の由来と鹿島との関係	128
ニニギノミコトとは別の天孫降臨	131
「天孫降臨」に関する通説の誤ち	135

### 第三章 ニニギノミコトの子孫たち

時代の推移を示すコノハナノサクヤヒメの逸話	140
神の子が人間社会の中に入っていく過程	143
コノハナノサクヤヒメと吾田鹿津姫	145
山幸・海幸とアマテラス・スサノオの関係	147
ホオリが美男であることの意味	150
日本の歴史の基本である山幸彦対海幸彦	153

日本列島恒常の課題が記されている日本神話	155
海の向こうに見る理想	156
綿津見の神の国とエクアドル	158
水平方向に転換されるべき関係	159

### 第四章 神武東征からわかる関東勢力の存在

神武天皇からすべては始まるという日本観	164
東を忘れた記紀の記述	166
イワレヒコ（神武天皇）の血統と呼び名	168
東征の決心と東方の意味	170
東征の中継地・吉備の国と前方後円墳	171
神武東征軍の水先案内人	173
ナガスネヒコ軍の東側に回り込む意味	174
イワレヒコ親族の最初の戦死	176
艱難辛苦が描かれる神武東征	177
鹿島神宮祭神タケミカヅチの心援	179

八咫鳥とイワレヒコの軍組織	180
軍略に長けた大和の支配者たち	181
決定的だったタカミムスビの登場	183
天孫降臨を忘れて土着したニギハヤヒ配下	185
神武東征は西を日本の中心とする過程	187
東征軍の土蜘蛛討伐の理由	190
オオモノヌシの娘を后とした理由	192
二柱のハツクニシラスメラミコト	193
お神楽と高天原	195
太陽を思った時、精神の活動が始まる	197
あとがき	201

序章 日本神話は歴史的事実の記憶である

## 「天孫降臨」のイメージと誤解

「天孫降臨」と聞いて、皆さんは、どのようなことをイメージをお持ちでしょうか。多くの場合、天空から光の道ないし雲の道が地上めがけて垂直にあるいは階段状に伸び、天空におられる神々が従神たちをひきつれて、その道に導かれて降り進んで地上に立つ、といった想像をされるのではないのでしょうか。それは恐らくは一神教のイメージで、天に神がおられるという前提があります。

日本の宗教は一神教ではありません。従ってこのイメージは、われわれ日本人の天孫降臨の実像からかけ離れていると思われまます。このイメージには多くの誤解があると同時に、最近の考古学・生物学的研究や発見によつて改める必要の出できた、日本の歴史そのものを転換すべき重要なテーマが潜んでいます。それをこれから、詳しくお話ししていきたいと思ひます。

なぜ、天孫降臨がこのような想像でとらえられているか、天孫降臨が現在、一般的にどのように考えられているか、まず、それを辞書でひもといて書いておくことにしましょう。

「記紀神話で、瓊瓊杵尊が高皇産霊尊・天照大神の命令で、葦原中国を統治するた

めに、高天原から日向国（＝宮崎県）高千穂峰に天降たこと。」（大辞林 三省堂）

他の辞書も大筋で変わるところはありませんが、同じ小学館でも、『大辞泉』では高千穂峰に「天降った」としていますが、『日本国語辞典』では「降りて来た」としていません。面白いのは、岩波書店の『広辞苑』です。「天降った」に変わるところはありませんが、「葦原中国を統治するために」という天孫降臨の目的の部分を省いており、参照せよという意味の矢印をつけて「天壤無窮の詔勅」に誘導しています。

「天壤無窮の詔勅」とは「天照大神が瓊瓊杵尊に賜った神勅」のことで、具体的には日本書紀の神代に一書として記されているアマテラスの言葉、「葦原の千五百秋の瑞穂の国は、わが子孫が王たるべき国である。皇孫のあなたが行って治めなさい。宝祚の栄えることは、天地と共に窮まりないであろう」（『全現代語訳日本書紀』宇治谷孟著 講談社）を指します。千五百秋とはきわめて長い年月のこと、宝祚とは皇位を継承することです。

ニニギノミコト（瓊瓊杵尊）はアマテラスの孫であり、天皇家初代神武天皇の曾祖父です。つまり、天孫降臨の際のアマテラスの「天壤無窮の神勅」とニニギノミコトの「降臨」という行動そのものが、今も綿々と続く天皇家の正当性の最大の根拠です。岩波書店の『広辞苑』はここを非常に気にしています。

戦前から戦後にかけて、記紀（古事記と日本書紀）研究の第一人者として知られた津田左右吉（一八七三〜一九六一年）という日本史学者がいます。津田左右吉は近代実証主義に基づき、史料価値という視点から記紀を批判的に分析し評価しました。簡単に言えば、記紀には事実が書かれているわけではない、としたのです。

大日本帝国政府は、日本精神の抹殺と天皇に対する不敬にあたるとして昭和十五年（一九四〇年）、津田の論文著書『古事記及び日本書紀の研究』『神代史の研究』『日本上代史研究』『上代日本の社会及び思想』を発禁処分しました。同年の津田の早稲田大学教授辞任も、時の文部省からの要求だったといえます。

戦後になって、津田左右吉の研究は、現在もまだあいかわらず続いているマルキシズムによる歴史観、つまり唯物史観一色に染まった歴史学者たちに大いに活用されました。津田の記紀批判を天皇否定・皇室廃止の根拠として利用したのです。その歴史観は、「権力者は常に民衆を抑圧する悪であり、抑圧される民衆は常に正義である」という政治イデオロギーのための道具に過ぎず、記紀を歴史上意味のないものにしようとしたのです。

戦前に天皇という歴史がただひたすらに神格化・絶対化されたとする見解は正しくはありません。しかしそれを主張している人々が、まだ多く学者の中にいます。それを主張して、戦後の天皇の根拠は失われているとしているのです。しかし、記紀批判をイデオロ

ギーのために使つて天皇を否定する戦後歴史学者の言い分こそ間違っているのです。

本書の目的は、ここ二、三〇年来、新発見の続く考古学研究、生物学研究の成果を参考にしながら、史料を実証的に分析し、「天孫降臨」が歴史的事実の記憶であることを明かすことにあります。日本の史は、大きく開かれることになるでしょう。そしてそれは、日本の歴史の根幹をつくり、日本人の祖先たちの営んできた長い歴史をわれわれの中に取り戻すということに他なりません。

なお、本書では時間的な位置をわかりやすくするために、年の表記はあえて西暦表記を使います。

### 天孫降臨の「天」とは何か

「天孫降臨」という言葉は、実は古事記にも日本書紀にも登場しません。「天孫」や「皇孫」は頻出しますが、「降臨」とはセットになりません。「天孫降臨」という言葉が頻繁に使われ始めるのは明治以降で、前述した津田左右吉は論文中に用語として使い、民俗学者の折口信夫（一八八七〜一九五三年）もたびたび使います。

最も一般化したのは、一九三五年（昭和一〇年）に日本政府が出した「第一次国体明徴声明」の冒頭「恭しく<sup>おもん</sup>惟みるに、我が國體は天孫降臨の際下し賜へる御神勅に依り昭示

せらるる所にして」においてでしょう。「天孫降臨」は、後世になって呼び習わすようになった、該当の神話部分全体を指す名称、あるいは書籍とした場合の構成上の章タイトルとした。

日本書紀に「降臨」という言葉は、神代巻から離れた巻第十四、雄略天皇の九年に「垂降臨」、「おいでください」という意味で初めて登場します。さらにいうと降臨には、「神仏が天から地上に天降る」以外に、単に「他人が来訪することを敬つていう語」という意味があります。ここにもちよつとした示唆があります。

それでは、記紀およびその他の史料に、天孫降臨の「天降る」場面はどう記されているでしょうか。先に申し上げておきますと、ポイントは、「天」という文字の意味、「降る」という言い方、あたかも空から地上に垂直に移動した、という文章から感じる印象にあります。元は漢文ですが、書き下し文で引用し、現代語訳を添えます。

#### 古事記

「かれここに天の日子番の邇邇芸の命、天の石位を離れ、天の八重多那雲を押し分けて、稜威の道別き道別きて、天の浮橋に、浮きじまり、そりたたして、筑紫の日向の高千穂の霊じふる峰に天降りましき。」

現代語訳「そこで天つ日子番の邇邇芸の命に仰せになって、天上の御座を離れ、八重立つ雲を押し分け、天からの階段によって、下の世界に浮洲があり、それにお立ちになって、遂に筑紫の東方なる高千穂の尊い峰にお降り申さしめました。」

〔『新訂古事記』 武田祐吉訳注・中村啓信補訂 角川書店〕

#### 日本書紀 神代下・本書

「皇孫、乃ち天磐座を離ち、且天八重雲を排分けて、稜威の道別きに道別きて、日向の襲の高千穂峯に天降ります。」

〔『日本古典文学大系・日本書紀』 岩波書店〕

現代語訳「皇孫は天の磐座を離れ、天の八重雲を押しひらき、勢いよく道をふみ分けに進み、日向の襲の高千穂の峯にお降りになった。」

〔前掲『全現代語訳日本書紀』〕

また、『日向国風土記』に天孫降臨が次のように記されていたことが、逸文（後世の書物での引用）のかたちで残されています。

「天津彦々火の瓊々杵尊、天の磐座を離ち、天の八重雲を排き、稜威の道別きに道別きて、日向の高千穂の二上の峰に天降りましし時、天暗冥く昼夜の別を知らず、人も

物も道を失ひ物色別き難くありき。」

現代語訳「天津彦々火の瓊々杵尊が、天の磐座を押し離し、八重に重なる天の雲を押し分けて、穢れない神の道を選び分け選り分けて、日向の国の高千穂の二上の峰にお降りになられた時、空は暗くて昼と夜の区別がなく、人も何もかも道をなくしてしまいい、物の区別がつかなくなった。」  
 (『日本古典文学全集・風土記 小学館』)

追って触れていく部分が多々ありますが、ここで問題としたいのは、「天」の字の読み方です。記紀の時代、「天」はそのほとんどすべてを「あま」、あるいは「あめ」「あも」など、その変化形で読みました。

この時代の公文書はすべて漢文で書かれました。口承で伝えられてきた言葉を漢字に置き換えていった、つまり、訓読みを漢文にしたものが古事記や日本書紀です。

古事記の冒頭に「高天原」が出てきますが、編纂した太安万侶は、その後には「高天原」が「高下天云阿麻下效此」という注釈をつけています。「高の下天は「あま」と読みなさい。以下、これに準じなさい」という意味です。

そして、当時、「天」という字は決して「空」の意味だけを持つものではありませんでした。それは、右記に引用した『日向国風土記』部分で「天暗冥く昼夜の別を知らず」の

「天」をわざわざ「そら」と読ませていることでわかります。

つまり「天」を「あま」またはその変化で読んだときには、「天」は「空」の意味に限らない、むしろ「空」の意味ではない場合がほとんどであると言えることができるのです。したがって、天孫降臨を、空から神が降りて来た、とイメージ通りに解釈してしまうのはあまりにも早計だ、ということになります。

天孫降臨は天Ⅱ空から「降りる」ではない

空から神が降りてくるイメージは、西洋文化、つまりキリスト教の文化からくるものです。明治期の文明開化以降、大量の西洋文化が急激に日本に流れ込みました。明治政府は国防政策の一環として文明開化を推進したわけですから、そこに非難はできません。

しかし、「天国が雲の上のはるかかなたの天空にある」という観念を持つキリスト教を根底とした西洋文化の流入は、その思想こそが高級なものだと日本人をして勘違いさせました。「天」の字は、おそらく明治以降、空間的に、空あるいは天空以外の意味を失ったのです。

また、「天」という漢字は、中国語においては、場所を指す場合においては「空」「天空」以外の意味を持ちません。これらのことから明治以降、特に戦後、比較神話学などと



名づけられた学問ジャンルにおいて、「天孫降臨」神話は大陸に由来するものであり、日本は中国あるいは朝鮮の神話を継承したに過ぎないなどといった自虐史観を応援してしまうこととなります。

確かに朝鮮には類似の伝承があります。しかし、文物のすべては大陸から朝鮮半島を経由して日本列島に流れ込んだとする文明史観は否定されてしかるべきものです。このことは、著書『高天原は関東にあった 日本神話と考古学を再考する』『日本の起源は日高見国にあった 縄文・弥生時代の歴史的復元』（共に勉誠出版）などで詳しく述べてきましたし、本書でもこれからたびたび触れることになるでしょう。

「あま」と音を発する言葉は日本語にはたくさんあります。その中で最も重要であると思われる言葉に「海」があります。

「天」と「海」は同じ音であり、古来、同じように神聖視されていたと考えられます。そればかりでなく、存在としても同一視されていた可能性があります。

海辺に行つて水平線を臨むときには、空と海とは一線上に合体して見え、自然に、天と海は同一だという感覚を持つでしょう。このように、形をまずあるがままに見て素直に評価する姿勢を私は「フォルモロジー（形象学）」として、専門のひとつである美術史に適用していますが、歴史を正しく知るために、現在の私達は、過去の時々暮らす人々の精

神にふさわしい表現の「形」を認識して、その「価値」あるいは「意味」を浮き彫りにして語る必要があります。

つまり、「天降る」は「海降る」に置き換えられる可能性が十分にあるのです。空の上から下に移動するのではなく、海上をある方向へ移動する、ということ。現代人の天孫降臨のイメージである垂直方向の移動は、ここにおいて、水平方向の移動に変換されることとなります。

日本人は古来、移動ということについて、都つまり中心へ向かうことを「上る（のぼる）」、地方へ向かうことを「下る（くだる）」と言い習わしてきました。京都の住所表記はその象徴でしょう。

物事を馬鹿にする「くだらない」という表現がありますが、これは江戸時代、関西から江戸に運び込む良質品を「下りもの」と言ったのに対して、江戸に運べるようなしろものではないものを「下らないもの」と言ったことに由来するとされています。現代の身近なところでは、都心へ向かう電車を「上り電車」、郊外へ向かう電車を「下り電車」と呼び親しんでいます。

天孫降臨は、あらゆる事実、あらゆる史料から考えて、「海を使った移動」以外にありえません。天空から垂直的に降りてくるといったファンタジーではなく、海を含めた

地上における、中央から地方への移動です。

日本は、決して抽象的な国ではありません。人々は具体的な現実の動きを記憶にとどめました。それがたまたま神話と呼ばれながら、歴史の実際が綿々と語り継がれてきた国なのです。

かつて人口は日本列島東部にのみ集中していた

拙著『日本の起源は日高見国にあった 縄文・弥生時代の歴史的復元』で、私は、天地開闢からおおよそ神武東征にわたる、いわゆる日本神話に表された事象が、歴史的事実に重なるということを検証し、詳しく述べました。最近の考古学的発見、生物学的研究で明らかになった縄文・弥生の時代推移は、日本神話と見事に重なるのです。

大切なところですので、おさらいをしておきたいと思います。最も重要だと思われるのは、縄文・弥生と呼ばれる時代の、日本列島における人口分布の推移です。

国立民族学博物館名誉教授・小山修三氏と椋山女学園大学人間関係学部教授・杉藤重信氏が一九八四年に国立民族学博物館研究報告として発表した「縄文人口シミュレーション」という研究です。簡単に説明すると、遺跡数から時代時代の人口数を割り出すことができる、という研究です。東京大学大気海洋研究所教授・川幡穂高氏が、地学専門誌『地

質ニュース』（産業技術総合研究所地質調査総合センター）二〇〇九年七月号に発表したたいへん興味深い論文『縄文時代の環境 その1——縄文人の生活と気候変動——』の中で、この「縄文人口シミュレーション」を論説根拠として採用し、縄文時代の人口分布推移について、次のように概論しました。

「縄文時代の東北から九州にいたる日本では、全人口は縄文中期で最も多く二六万人であった。興味深いのは、関東地方と中部地方で人口密度が最も高いことである。面積が広い東北地方も人口そのものは多い。全体の傾向として、縄文時代を通じて、人口は東日本に多く西日本に少ない。基本的に西日本での人口密度は東日本の1/10にも満たず、人口密度が東北地方と逆転するのは弥生時代に入ってからである。」

（前掲論文）

川幡穂高氏が論文の中で述べられていることを整理しますと、日本列島における人口分布推移は次の通りです。

■縄文早期（約九五〇〇年前〜六〇〇〇年前）の全国の人口は二万人前後。